

田中一良 著

らい全快者 奇蹟の社会復帰

すばらしき復活



（かみずとし）
十一良

一九四〇年四月五日、岡山市に生まれる。

一九六四年、早稲田大学国文科卒業。

一九六七年、フリーランスのリポーターとして週刊誌の世界に入る。

一九七二年、株式会社タック（宣伝・企画）を設立、代表取締役として現在に至る。

現住所／158 東京都世田谷区

深沢八丁目七番一七号

セブンスターマンション

深沢三〇一号

すばらしき復活

著者 * 田中一良

発行者 * 長谷川佳哉

発行所 * 株式会社すばる書房

東京都文京区水道一―五―二四
電話（東京）八一五―二三八六（代）
振替（東京）九―四六八七四

印刷製本所 * 東洋オフセット株式会社

©1977 Kazuyoshi Tanaka

検印廃止

落丁・乱丁はお取替えいたします

0096-60303-5740

らい全快者 奇蹟の社会復帰

すばらしき復活

一良 著

すばる書房



序文

生きた菩薩

花園大学学長
妙心寺師家

山田 無文

青年の頃、小説『小島の春』を読んで、異常な感激を受け、幼な友達の四谷義之君が、愛生園で光田健輔先生の元で働いていることを憶い出して、愛生園へ一度行って見たいな、四谷君に逢って話したいな、と頻りに考えさせられたことである。

しかしその頃わたしは京都の禅堂で修行中で、そういう自由も、寸暇も無かった。幸いに昭和二四年の秋、妙心寺から招かれ靈雲院住職となつて自分の自由の時間が得られたので、二五年の春、島に桜の咲く頃であった、初めて愛生園をお訪ねしたのである。

しかし残念なことに四谷君は既にこの世の人ではなかった。幸いに光田先生はご健在

で、親しくお目にかかることが出来た。婦長さんのご案内で、重病患者の病棟を慰問させていただいてのち、会館で法話をせよという依頼を受け、ご挨拶かたがた一時間ほどお話し申し上げた。

その時の患者自治会長が田中文雄さんだった。わたしの講話に対する謝辞を述べられ、簡単にご自分の来歴を話された。この時が田中文雄即ち鈴木重雄君とわたしとの始めての出会いであった。

それ以来わたしは毎春、長島の愛生園、光明園、大島の青松園と、この瀬戸内三園を慰問することになり、いつも、い、い、に同情を持つ人たちが数人をお伴して参ることになった。

しかしこの不治の病として嫌われ恐れられたら、い、い、が治ることになった。イエスさまも聖徳太子さまも、ただ愛憐の情を施されたに過ぎなかったら、い、い、が全治するという、奇蹟が行われるようになった。プロミンという偉大なる薬の発明は、人類始まって以来の福音であった。

全快者は次第に社会復帰できるようになり、田中文雄君も遂に実社会へ飛び出して活躍される時が来た。三十年間も埋没されていた生命力と、積極的なその手腕が、潑刺として発揮される時が来た。

既に二十数年に亘る兄弟のような交際であるが、わたしは一度も田中君の個人的な問題に就てお尋ねしたことは無かった。そう私事に触れることは失礼だと思ったからである。ただ東京商大の中退生であり、三原山並びに東京湾の自殺未遂者であることしか知らなかった。

しかしこの度、鈴木君の自叙伝かと思われるような、本書『すばらしき復活』を拝受して一気に読みほした。そして初めて鈴木君の詳しい来歴と、その人柄と、多年に亘る闘病の苦悶と、そして熱烈な行動力などを、仔細に知らされて、只々驚嘆するばかりである。らいは神が君に与えた試練であつたに違いない。いや神は人類に最後の福音を与えるために、君をらいに選んだに違いない。らいは必ず治るという未曾有の福音を、神は君によって広く人類に伝えしめられたのである。

今日、君が気仙沼、唐桑を中心として、社会の平和と人類の福祉のために、雄々しくも活躍されておる姿を見ると、わたしは「生きた菩薩」と合掌せざるを得ない。

この一卷の書『すばらしき復活』は、世界のあらゆる人びとに、生命の尊厳と人生の真価を、心から感得せしめずにはおかないであろう。

人間の尊厳と奉仕の善美の証し

同志社大学名誉総長・評議員会議長
国際基督教大学名誉総長・理事長

湯浅 八郎

アメリカの小学校の卒業証書をもち、大学も大学院も全て外国で体験した私は、不幸にして崇敬心服している先輩恩人をもたないのであるが、鈴木重雄氏は私にとって所謂恩人以上の恩人なのである。何故なら彼は人間の尊厳と自由と人権を、身をもって証している人物であるからである。

私が初めて鈴木さんに遇ったのは東京三鷹の国際基督教大学キャンパスの総長邸であった。紹介者は私の一人息子・洋であったが、彼は学生時代から日本救難運動の先覚第一人者光田健輔先生の感化により、ハンセン氏病に深い関心を寄せ、しばしば長島の愛生園を訪ねている間に鈴木さんと親しくなったのである。私が握手を求めて何気なく差し出した手を、鈴木さんは何のためらいもなく、病痕を残す手で強く握りしめてくれたのである。私はその瞬間、非凡な人間の存在を意識したのであった。

爾来、鈴木さんの人生体験を知れば知るほど、この印象は益々深くなるのであった。鈴木さんは社会復帰を決意して二十七年振りに忽然帰省したが、現在ですら難病に関する無

知と迷信から解放されていない日本の社会であるから、いわんや当時の社会通念からすれば、家族と故郷の社会も既に死亡したものと諦めていた事とて、鈴木さんの帰省は実に驚天動地の一大事件であった事は想像に難くない。

しかし、良心的勇氣と人道的良識の在る所には奇蹟は現われる。家族も旧友達も一切の偏見迷信を超えて、温かく鈴木さんを抱擁迎え入れたのであった。そしてその後は、社会復帰第一号としての驚嘆すべき彼の社会奉仕活動が展開される事になったのである。

私は『すばらしき復活』は、ひとり日本に於てのみならず、広く世界に伝えるに値するものであると確信する。何故ならこれこそは、人間の尊厳と奉仕の善美を証しする活きたドキュメントであると考えられるからである。

この事実の重さ

元同志者大学教授
評論家

鶴見俊輔

一九七三年四月一日、宮城県唐桑町の町長選挙が行われた。

鈴木重美候補 二九五七票

鈴木重雄候補 二七七四票

この町長選挙に敗れた鈴木重雄が、この本の主人公である。

宮城県の一つの町の町長選挙に立候補して接戦で敗れたというようなことは、世界史の上では小さい事件のように感じられるかも知れないし、日本に起こった事件としても小さいように感じられるかも知れない。

だが、事件の大小がそのようには測り得ないことを、この本の読者は、分かっていただけだろう。

七三年四月一日の町長選挙のことを、私はメキシコで、友人からきた手紙で知って、おどろいた。そういうことが、この日本に、（もっと大きく、思いきって言えば、この世界に）起こり得るのか、という感想である。

この本にあるように、四十年前には、鈴木重雄は、本籍もなく、名前もない一人の青年だった。

内科医師が彼にたずねる。

「君は、自分の本籍を覚えていますか」

「自分の本籍を知らない人間はいないでしょう」

そう彼は、警戒して答える。すると医師は、

「君は多分忘れて困っているのだろう。智頭町（鳥取県にある町）からは、該当者なしの返事が来てね、このようにカルテには赤い字で記入されているよ。あとで、看護婦に君の本籍地を書いたメモを持って来させるからね」

「私も思い出せなくて困っているんです。よろしくお願い致します」

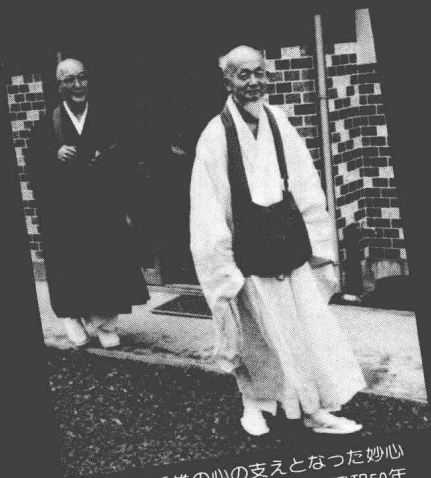
しばらくして彼のところに愛生園事務所から届けられたメモには、彼が前に申告したいつわりの場所がそのまま書かれていた。彼は、親切な医者のはからいに感謝して、そのまま鳥取県でとおすことにした。

名前も、本籍も、架空のもので、親兄弟も（実際に付き合う相手としては）なく、彼は生きて来た。

もしも彼が、いにかからなかったとしたら、世俗的な榮譽を思いのままに得る地位に進み得たであろう。彼の能力と辛抱づよさを知っているものは、そのことをうたがわない。

しかし、この世は彼に、別の道を歩ませた。病を得て彼は、自分の名前もその名前によるつながりをも失い、四十年もの後に故郷に帰ってきた。町長選挙での惜敗は、そのように彼を迎える人が故郷にいたこと、彼を支援する人々が日本の各地から集まって来たことをはつきりと示す一つの事実である。

戦争前には起こり得なかった明るい事実が、少なくともここに一つ、この日本にあるということを、私は教えられた。



鈴木重雄の心の支えとなった妙心
寺師家・山田無門老師（昭和50年
秋、唐桑の自宅に迎えて）。



高輪中学五年生。胸の
バッジは、各中学一名ずつ、学業・ス
ポーツに秀でた者に府知事から贈られ
たものである（昭和5年）。

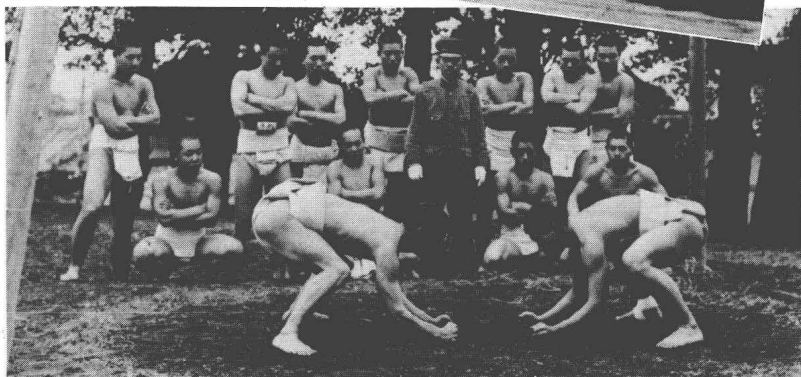


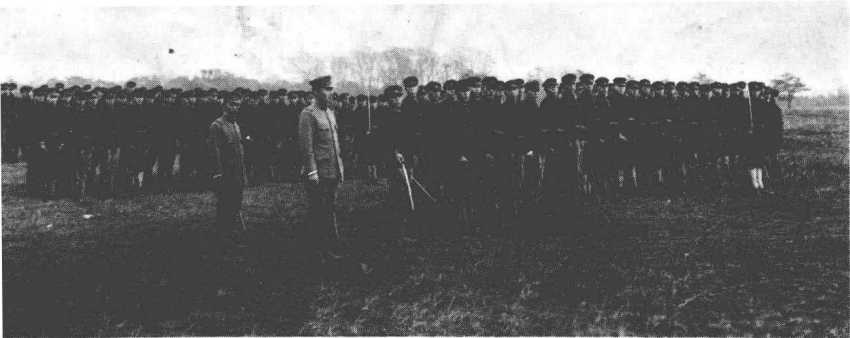
尋常小学六年生。恩師、級友と
ともに（後列左、大正14年）。

中学四年生。鈴木は剣道部に
も籍を置いて活躍した（後列
左から二人目、昭和5年）。



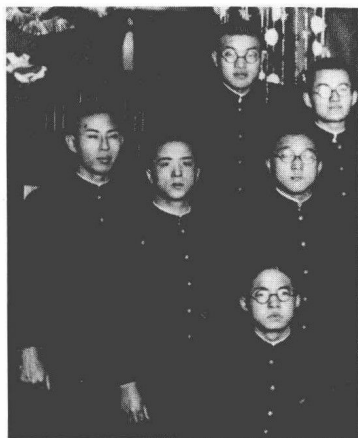
中学五年生。鈴木は相撲部にも入
って練習に励んだ（高輪中学の土
俵にて、左から三人目、昭和5年）。





中学五年生、代々木練兵場における軍事教練。写真中央でサーベルを持つ中隊長が鈴木である（昭和5年）。

東京商科大学予科（現一橋大学）二年生。互助会のクラスメートと（左から二人目、昭和7年）。



東京商科大学予科三年生。級友たちと（上から二列目、左から三人目が鈴木。昭和8年）。

